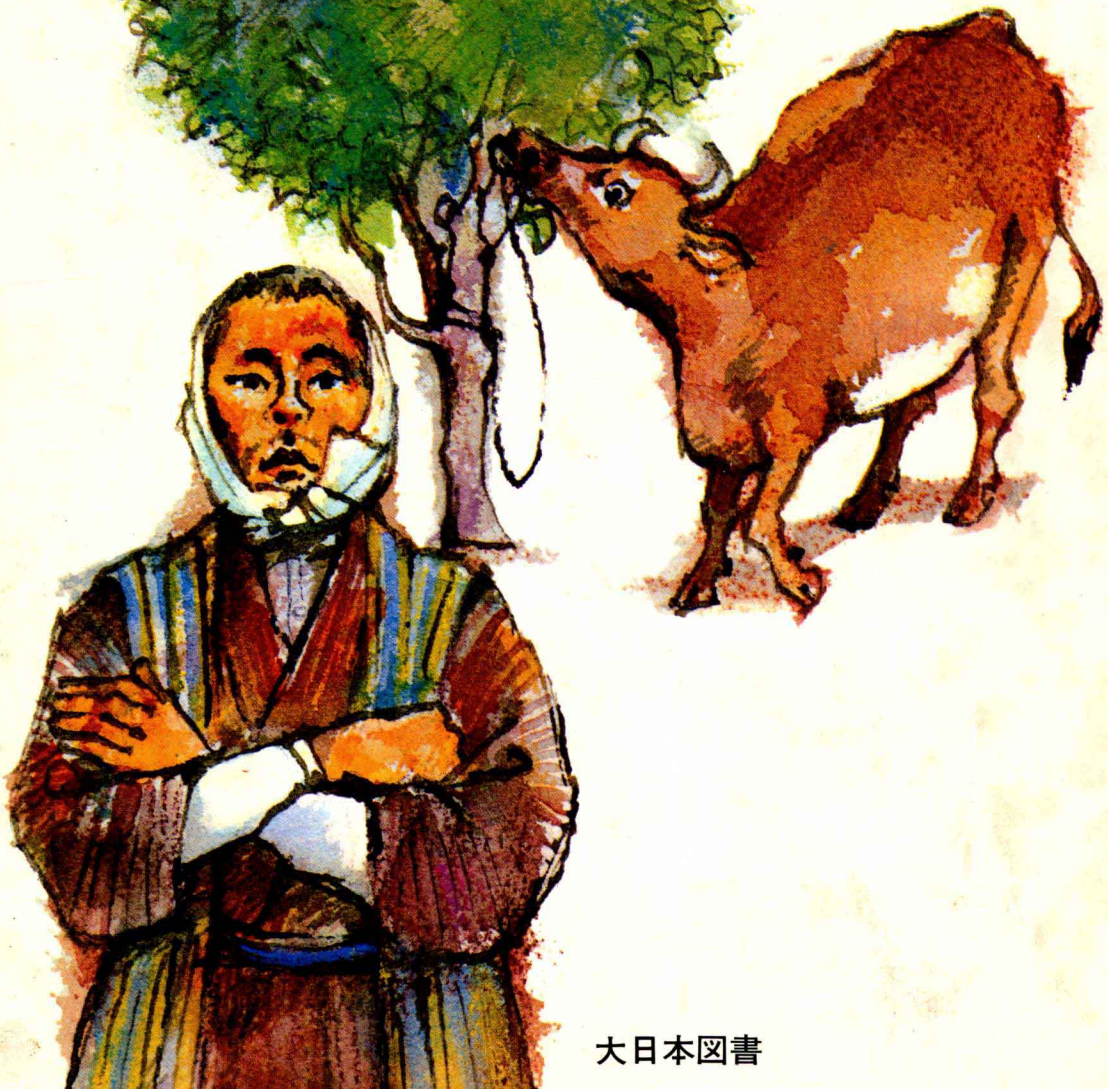


新美南吉童話選集

牛をつないだつばきの木

吉井 忠 画



大日本図書

*

にい み なんきち

新美南吉

1913 年～1943 年。愛知県半田市岩滑（やなべ）に生まれる。県立半田中学校在学中から童話を書きはじめ、雑誌『赤い鳥』に投稿、「正坊とクロ」「ごんぎつね」等で鈴木三重吉に見出される。1932 年、東京外国語学校英語部文科に入学、巽聖歌宅に寄寓。『赤い鳥』『チチノキ』等に、童話、童謡を発表。1934 年ころから病を得、1936 年、東京外国語学校を卒業後、帰郷。病をおして、河和（こうわ）小学校、県立安城高等女学校で教壇に立ち、かたわら創作に没頭する。1942 年、病勢進行し死を覚悟する（日記より）”なかで、自らの命をけずるような創作活動を展開、この年に「おじいさんのランプ」をはじめ南吉の主要な作品を完成する。1943 年 3 月 22 日、30 歳の若さで永眠した。南吉の童話作品を網羅した『新美南吉童話全集』（全 3 巻 大日本図書）、日記、詩、書簡等まで収録した『新美南吉全集』（全 8 巻 牧書店）等がある。

*

牛をつないだつばきの木

1973 年 11 月 30 日 第 1 刷発行©

1981 年 5 月 10 日 第 7 刷発行

著者 新美南吉／画家 吉井 忠／発行者 佐久間裕
三／発行所 大日本図書株式会社 東京都中央区銀座
1—9—10 電話 (03)—561—8671～9 振替口座 東京
9—219 番

印刷 精興社 製本 岸田製本

牛をつないだつばきの木



新美南吉 作
吉井忠画



牛をつないだつばきの木／もくじ

牛をつないだつばきの木

5

《詩》

むかし パリーのの 32

ひらがな幻想 34

ひよこ 36

和太郎さんと牛 37

この本を読んだみなさんへ 佐藤通雅



<画家紹介>

吉井 忠よし い ただし 1908年，福島県生まれ。太平洋洋画研究所
に学び，洋画家となる。著書に『民芸論』
(彰考書院)『ピカソ』(青木書店)などがある。現在，主体美
術協会々員。

現住所 東京都豊島区西池袋 4—12—7

牛をつないだつばきの木



山の中の道のかたわらに、つばきの若木わかしがありました。牛ひきの利助りすけさんは、それに牛をつなぎました。

人力じんりきひきの海蔵かいぞうさんも、つばきの根もとへ人力車じんりきしゃをおきました。人力車じんりきしゃは牛ではないから、つないでおかなくてもよかったのです。

そこで、利助りすけさんと海蔵かいぞうさんは水を飲みのに山の中にはいっていきました。道から一町ちやうばかり山にわけいったところに、清くてつめたい清水しみずがいつもわいていたのであります。ふたりはかわりばんこに、泉いずみのふちの、しだやぜんまいの上に、両手をつき、腹はらばいになり、つめたい水のおいをかきながら、鹿しかのように水を飲みました。腹はらの中がごぼごぼというほど、飲みました。

山の中では、もう春ぜみが鳴いていました。

「ああ、あれがもう鳴き出したな。あれを聞くと暑あつくなるて。」と海蔵かいぞうさんが、まんじゅう笠がさをかぶりながらいいました。

「これからまた、この清水をゆききのたんに、飲ませてもらうことだて。」

と利助さんは、水を飲んで汗が出たので、手ぬぐいでふきふきいいました。

「もうちと、道に近いとええがのオ。」

と海蔵さんがいいました。

「まったくだて。」

と、利助さんが答えました。この水を飲んだあとでは、だれでも、そんなことをあいさつのようにいいあうのがつねでした。

ふたりがつばきのところにもどつてくると、そこに自転車をとめて、ひとりの男の人が立っていました。そのころは自転車は日本にはいつてきたばかりのじぶんで、自転車をもっている人は、田舎では旦那衆にきまっていました。

「だれだろう。」

と利助さんが、おどおどしていいました。

「区長さんかもしれん。」

と、海蔵さんがいいました。そばにきて見ると、それはこの付近の土地をもっている、町の年とった地主であることがわかりました。そしてもうひとつわかったことは、地主がかんかんにおこっていることでした。

「やいやい、この牛はだれの牛だ。」

と地主は、ふたりを見るととなりつけました。その牛は利助さんの牛でありました。

「わしの牛だかのイ。」

「てめえの牛？　これを見よ。つばきの葉をみんな食って、すっかりぼうずにしてしまったに。」

ふたりが、牛をつないだつばきの木を見ると、それは自転車をもった地主がいったとおりでありました。若いつばきの、やわらかい葉はすっかりむしりとられて、みすばらしい杖のようなものが立っていただけでした。

利助さんは、とんだことになったと思って、顔をまっかにしながら、あわてて木から綱をときました。そして申しわけに、牛の首ったまを手綱でぴしりと打ちました。

しかし、そんなことくらいでは、地主はゆるしてくれませんでした。地主はおとなの利助さんを、まるで子どもをしかるように、さんざんしかりとばしました。そして自転車のサドルをパンパンたたきながら、こういいました。

「さあ、なんでもかんでも、もとのように葉をつけてしめせ。」

これはむりなことでありました。そこで人力ひきの海蔵さんも、まんじゅう立をぬいで、利助さんのためにあやまってやりました。



9 牛をつないだつばきの木

「まあまあ、こんどだけは、かにしてやってくれやす。利助^{りすけ}さま、まさか牛がつばきを食ってしまうとは知らずにつないだことだで。」

そこでようやく地主^{じぬし}は、腹^{はら}の虫がおさまりました。けれどあまりどなりちらしたので、からだがふるえるとみえて、二、三べん自転車^{じてんしゃ}にのりそこね、それからうまくのって、いってしまいました。

利助^{りすけ}さんと海蔵^{かいぞう}さんは、村の方へ歩きだしました。けれどももう話をしませんでした。

おとながおとなにしっかりとばされるというのは、なさけないことだろう、人力^{じんりき}ひきの海蔵^{かいぞう}さんは、利助^{りすけ}さんの気持ちをくんでやりました。

「もうちょっと、あの清水^{しみず}が道に近いとええだかのオ。」

と、とうとう海蔵^{かいぞう}さんがいいました。

「まったくだて。」

と、利助^{りすけ}さんが答えました。

海蔵さんが、人力ひきのたまり場へくると、井戸ほりの新五郎さんがいました。人力ひきのたまり場といっても、村の街道にそうした駄菓子屋のことでありました。そこで井戸ほりの新五郎さんは、油菓子をかじりながら、つまらぬ話を大きな声でしていました。

井戸のそこから、外にいる人にむかって話をするために、井戸新さんの声は大きくなくなってしまったのであります。

「井戸でもなア、いったい、いくらくらいでほれるもんかい、井戸新さ。」

と海蔵さんは、じぶんも駄菓子箱から油菓子を一本つまみ出しながらききました。

井戸新さんは、人足がいくらいくら、井戸囲の土管がいくらいくら、土管のつぎめをうめるセメントがいくらいくらと、こまかく説明して、

「まず、ふつうの井戸なら、三十円もあればできるな。」

といいました。

「ほオ、三十円な。」

と、海蔵^{かいぞう}さんは目をまるくしました。それからしばらく、油菓子^{あぶらがし}をぼりぼりかじっていましたが、

「しんたのむねを下りた^{*}ところにほったら、水が出るだろうかなア。」

とききました。それは、利助^{りすけ}さんが牛をつないだつばきの木のあたりのことでありました。

「うん、あそこなら、出ようて。前の山で清水^{しみず}がわくくらいだから、あの下なら水は出ようが、あんなところへ井戸^{いど}をほってなんにするだよ。」

と、井戸新^{いどしん}さんがきました。

「うん、ちっとわけがあるだて。」

とこたえたきり、海蔵^{かいぞう}さんはそのわけをいいませんでした。

海蔵^{かいぞう}さんは、からの人力車^{じりきしゃ}をひきながら家に帰^{かえ}っていくとき、

「三十円な。……三十円か。」

と、なんどもつぶやいたのでありました。

海蔵^{かいぞう}さんは、やぶをうしろにした小さいわら屋に、年とったおかあさんとふたりきりで住んでいました。ふたりは百姓^{ひやくしやうしごと}仕事をし、ひまなときには海蔵^{かいぞう}さん

が、人力車をひきに出ていたのであります。

夕飯のときにふたりは、その日にあったことを話しあうのが、たのしみでありました。年とったおかあさんは、となりのにわとりがきょうはじめてたまごをうんだが、それはおかしいくらい小さかったこと、背戸のひいらぎの木に、はちが巣をかけるつもりか、きのうもきょうもようすを見にきたが、あんなところにはちの巣をかけられては、味噌部屋へ味噌をとりに行くときに、あぶなくてしょうがないというようなことを話しました。

海蔵さんは、水を飲みにいっている間に、利助さんの牛がつばきの葉を食ってしまったことを話して、

「あそこの道ばたに井戸があったら、いいだろうにのオ。」
といいました。

「そりゃ、道ばたにあったら、みんながたすかる。」

といって、おかあさんは、あの道を暑い日ざかりに通る人びとをかぞえあげました。大野の町から車をひいてくる油売り、半田の町から大野の町へ通う飛脚屋、村から半田の町へ出かけていく羅宇屋の富さん、そのほかたくさんの荷馬車ひき、牛車ひき、人力ひき、遍路さん、こじき、学校生徒などをかぞえあげました。これらの人ののが、ちょうどしんだのむねあたりでかわかぬわけにはいき

ません。

「だで、道のわきに井戸があつたら、どんなにかみんながたすかる。」

と、おかあさんは話をむすびました。

三十円くらいで、その井戸がほれるということを、海蔵さんが話しました。

「うちのような貧乏人（びんぼうにん）にゃ、三十円といや大した金で目がまうが、利助（りすけ）さんこのような成金（なまきん）にとっちゃ、三十円ばかりはなんでもあるまい。」

と、おかあさんはいいました。海蔵（かいぞう）さんは、せんだって、利助（りすけ）さんが山林でたいそうなお金をもうけたそうな、と聞いたことを思い出しました。

ひと風呂あびてから、海蔵（かいぞう）さんは牛車ひきの利助（りすけ）さんの家へ出かけていきました。

うしろ山で、ほオほオとふくろうが鳴いていて、崖（がけ）の上の仁左衛門（にざえもん）さんの家では、念仏講（ねんぶつこう）があるのか、障子（しょうじ）にあかりがさし、木魚（もぎょ）の音が、崖（がけ）の下（した）の道までこぼれていました。

もう夜でありました。いってみると、働きもの（はたら）の利助（りすけ）さんは、まだ牛小屋（うしや）の中の暗（くら）やみで、ごそごそとなにかしていました。

「えらい精（せい）が出るのオ。」

と、海蔵（かいぞう）さんがいいました。



15 牛をつないだつばきの木